

第25回日本医療薬学会年会の 開催概要とポイント

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科薬物動態学分野

教授 安原 真人

●25年の節目に未来への飛躍を目指す●

平成27年11月21日から23日の3日間、横浜市西区のパシフィコ横浜において、第25回日本医療薬学会年会を開催させていただくことになりました。

日本医療薬学会は、今年で設立25年を迎えました。この間、医療と薬剤師を取り巻く環境は劇的に変化し、薬剤師の職能を支える医療薬学の研究・教育は大きな発展を遂げました。そこで、第25回という節目に当たる本年会は、これまでの医療薬学の発展を振り返るとともに更なる飛躍を目指して、テーマを「医療薬学の進歩と未来一次の四半世紀に向けて一」としました。これからの25年に向けて我々が成すべきことは何か、年会での議論を通じて皆様方の未来を明るく照らすことができればと考えています。

これまでの医療薬学会の歴史を簡単に振り返ってみますと、日本医療薬学会の前身である日本病院薬学会は、平成2年6月に日本病院薬剤師会が中心となって設立されました。平成10年には認定薬剤師制度をスタートさせ、現在では認定薬剤師が1,349名、指導薬剤師が759名となりました。平成13年1月に学会の名称を「日本医療薬学会」に変更し、病院薬剤師に限ることなく、保険薬局から製薬企業、行政まで、学会のウイングを大きく広げました。平成20年12月に学会の法人化を果たし、「一般社団法人 日本医療薬学会」となりました。平成21年にはがん専門薬剤師制度を日本病院薬剤師会から移管し、翌年、がん専門薬剤師は医療法上広告可能な制度として認定されました。さらに、平成24年には薬物療法専門薬剤師制度を発足させています。こうして、設立当初1,200名余りであった会員数は右肩上がりに増加し、昨年末には1万人を超えることになりました。

会員数の増加とともに、年会の参加者数、演題数、シンポジウム数なども増加し、2日間の会期では収まりきらない状況を理事会で協議し、第25回年会より会期を3日間に延長することになりました。会期延長に伴い、これまで年会前日に開催していた病院薬局協議会／学術フォーラムは年会期間中に行うことになりました。

●多角的に医療薬学を捉えるプログラム●

それでは、第25回年会のプログラムの概要をご紹介します。

特別講演には、多方面で活躍される6人の専門家をお招きしました。年会初日の特別講演1では、京都大学大学院薬学研究科の橋田充教授に「薬物投与技術の進歩と将来の医療」と題して講演いただきます。DDS研究の第一人者である橋田先生は、厚生労働省薬事・食品衛生審議会会長を現在務めておられます。

特別講演2では、厚生労働省の成田昌稔審議官に「多職種連携において薬剤師が真価を發揮するために」と題して、行政の立場から薬学・薬剤師の現状と課題についてお話しいただきます。

初日午後の特別講演3では、聖路加国際病院の福井次矢院長に「これからの医療とわれわれに求められるもの」と題して、広くこれからの医療のあり方について講演いただきます。福井先生は、EBMを基盤とする医学・医療のオピニオンリーダーとして知られ、本年4月から施行された人を対象とする医学系研究に関する倫理指針の取りまとめにも当たられました。

特別講演4では、東京大学大学院医学研究科の水島昇教授に「オートファジーの謎に迫る」と題して講演いただきます。水島先生は、現在ノーベル賞に最も近い日本の研究者の一人であり、ライフワークであるオートファジー（自食作用）のご講演を通して、基礎研究に対する考え方やその醍醐味をご紹介します。

特別講演5では、American College of Clinical PharmacyのWafa Dahdal先生に「Standards for Clinical Pharmacy Practice」と題して講演いただきます。Dahdal先生は、国際薬学連合の薬学教育セクションでセクレタリーを務めてこられ、国際的な視点から臨床薬剤師業務の標準化について解説いただく予定です。

年会最終日午後の特別講演6では、一橋大学国際・公共政策大学院の井伊雅子教授に「医療のあり方を経済学で考える」と題して講演いただきます。井伊先生は、政府税制調査会委員やNHK経営委員なども務めておられる経済学者であり、経済学の立場からみた医療を解説いただきます。

年会2日目夕刻には、「薬学教育の将来を考える」と題した教育セミナーを企画しました。6年制と4年制が並立した新薬学教育制度の下で10年が経過しました。本年度から改訂モデルコアカリキュラムによる6年制教育がスタートするなど、薬学教育の改革は進みつつあるものの、超高齢社会における医療、教育のあり方が問われるなかで、今後の改革の方向性を定めることは容易ではありません。そこで、現在の薬学教育の中核を担う4人の薬学部長の先生方に、薬学教育の将来像を語っていただきます。

年会3日目午前には、25年という節目に、医療薬学の更なる飛躍を期して、次の四半世紀を支える若手による特別企画シンポジウムを設定しました。「次の四半世紀に向けて医療薬学を考える」とのテーマの下で、病院薬剤師、薬局薬剤師、大学教員、行政と異なる立場の若手シンポジストに講演いただき、会場の参加者も交えて、医療薬学の未来に向けた課題と展望について討論します。

●第25回年会へのご参加を●

公募シンポジウムには57件の応募をいただき、組織委員会による審査の結果、43件が採択されました。科学論文の書き方から、基礎と臨床の橋渡し教育、フィジカルアセスメント、スポーツファーマシスト、がん化学療法、処方電子化、と多岐にわたるテーマのシンポジウムが3日間にわたり繰り広げられます。年会初日午後には、日本、中国、韓国、タイの4カ国による国際シンポジウムも予定されています。

一般演題募集には過去最高となる1,705題の登録をいただきました。実行委員会による査読の結果、口頭発表326題、ポスター1,373題の計1,699題が採択されました。さらに、インターナショナルポスターが加わります。本年会においても、口頭発表における優秀演題賞を設けました。優秀演題候補セッションに応募された演題のなかから、実行委員会で選考された50題が年会初日午後の優秀演題候補セッションで口頭発表を行います。発表内容を選考委員会で審査し、優秀演題に選ばれた方は、年会2日目夜の懇親会で表彰される予定です。ポスターセッションの会場スペースと閲覧時間についても、できるだけ余裕を持たせるようにしました。会期の延長により、参加者がより多くのセッションに臨むことが可能となり、第25回年会が最新の研究成果について忌憚なく議論いただく機会となることを願っています。

また、年会最終日の午後には、パシフィコ横浜アネックスホールで、公開市民講演会を開催します。神戸大学教授・薬剤部長の平井みどり先生とシンガーソングライターのより子さんに、講演とミニライブを通して「いのち輝く未来に向けて」というテーマで語り合ってください。

昨年、名古屋で開催された第24回年会では過去最高の8,203名の一般参加者数を記録し、たいへん盛り上がりました。医療薬学への関心の高さを反映するかのようになり、今回第25回年会の事前登録者数は現時点で6,580名と、すでに昨年の事前登録者数を超えており、昨年に引き続き多くの方に参加いただけるものと期待しています。江戸時代にいち早く開港した横浜は、いわゆる文明開化の始まりの地であり、医療薬学の未来を語る上で絶好のロケーションでございます。2020年には「Discover Tomorrow～未来をつかもう～」をスローガンに東京でオリンピックも開催されます。我々も、「お・も・て・な・し」の精神で皆様をお迎えいたしますので、多数の皆様のご参加を心からお待ちしております。